

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第9冊目として、このたび特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

平成15年1月

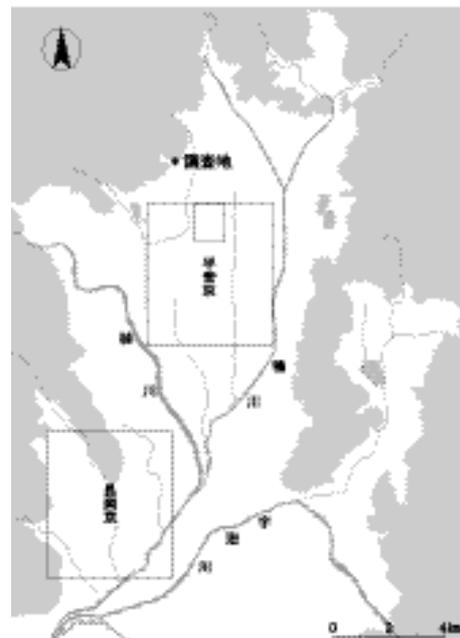
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園
- 2 調査地点所在地 京都市北区金閣寺町 1 番地
- 3 委託者及び承諾者 宗教法人 鹿苑寺 代表役員 有馬頼底
- 4 調査期間 第 8 次調査：2001年 4月23日～2001年 5月24日
第 9 次調査：2002年 1月25日～2002年 2月 5日
- 5 調査面積 第 8 次調査：64m²
第 9 次調査：25m²
- 6 調査担当職員 第 8 次調査：東 洋一
第 9 次調査：鈴木久男
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「衣笠山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 調査毎に番号を付し、遺構種別を前に付した。
- 13 遺物番号 調査毎に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 作成担当職員 東 洋一
鈴木久男

（調査地点図）



目 次

第 8 次調査

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	2
3 . 遺 物	4
4 . ま と め	6

第 9 次調査

1 . 調査経過	7
2 . 遺 構	8
3 . 遺 物	10
4 . ま と め	11

図 版 目 次

図版 1	第 8 次調査 遺構	1 拡張前トレンチ全景 (北から)
		2 柱列 (東から)
図版 2	第 8 次調査 遺構	1 北トレンチ全景 (北から)
		2 Pit 1 (南から)
図版 3	第 9 次調査 遺構	1 調査区全景 (東から)
		2 土壌 1 遺物出土状況 (西から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査前全景	2
図 3	調査状況	2
図 4	遺構実測図 (1 : 100)	3
図 5	出土遺物拓影・実測図 (1 : 3)	5

図6	調査位置図(1:2,500)	7
図7	調査区配置図(1:200)	8
図8	調査前全景	8
図9	調査状況	8
図10	遺構実測図(1:50)	9
図11	南壁断面図(1:50)	10
図12	軒瓦拓影・実測図(1:3)	11
図13	調査地と瓦出土地点(1:2,000)	12

表 目 次

表1	遺構概要表	2
表2	遺物概要表	4
表3	遺構概要表	10
表4	遺物概要表	10
表5	調査一覧表	12

第 8 次調査

1 . 調査経過

本調査は、特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園第 8 次調査にあたる。調査対象地は、鹿苑寺境内庫裏の東方、台地状に位置する旧荘厳院跡地である。旧荘厳院跡地に新たな書庫の建設計画がなされたため、京都府教育庁指導部文化財保護課の指導のもとに発掘調査を実施する運びとなった。

調査は、書庫建設予定地に幅 1.5m のトレンチを十文字に設定し、盛土・耕作土は重機で掘削し、旧荘厳院土台跡を人力で排出した後、開始した。

調査の結果、トレンチ南部で南北方向の 2 基の柱穴（柱当心々 5 尺・真北から 8 度西に振れる）を検出した。当初、廊跡の柱穴と考え、続きを確認するために東にトレンチを拡張した結果、北

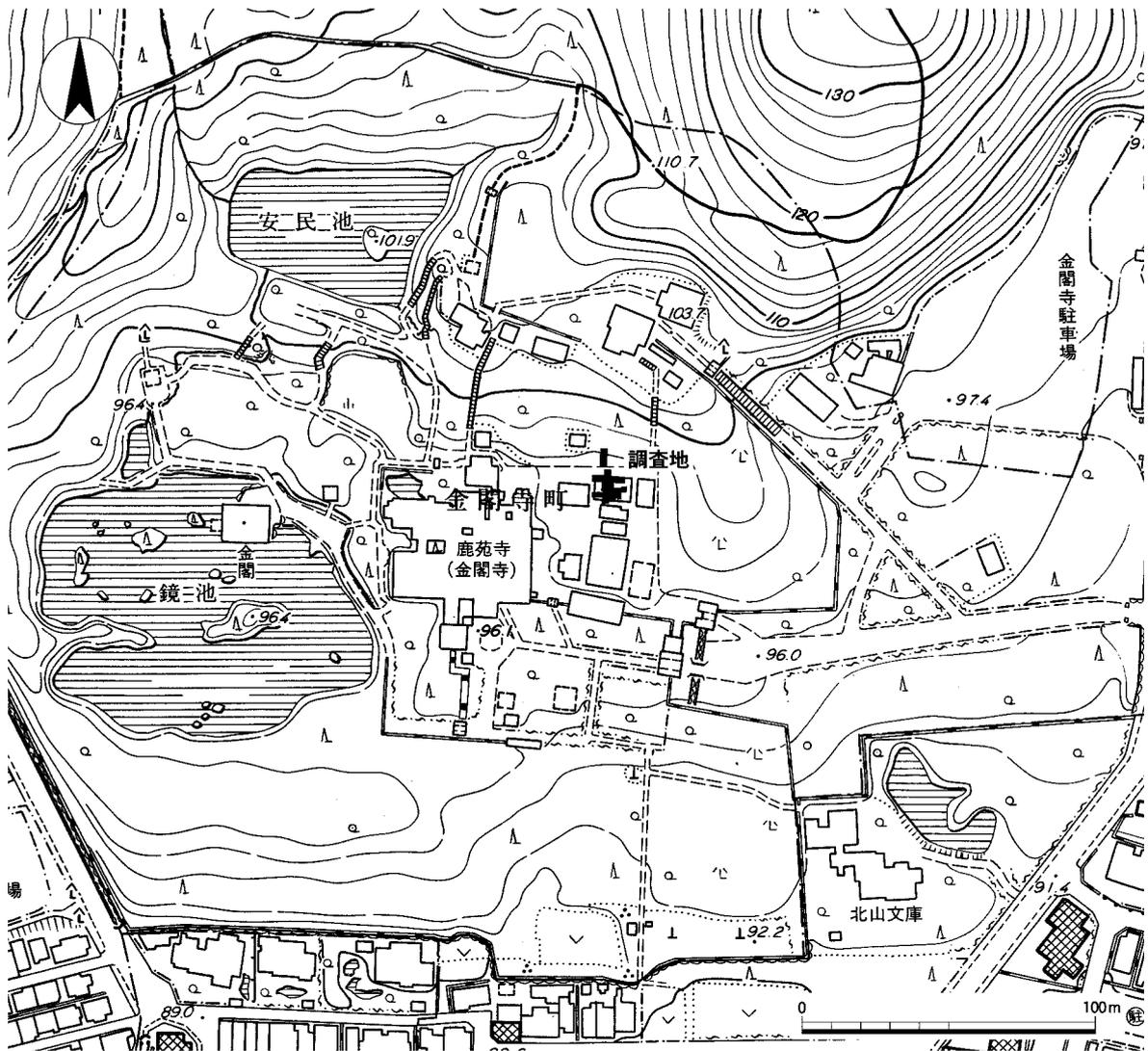


図 1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景



図3 調査状況

側柱穴に対応する東方向3間分の柱列を検出した。また、それに平行して南側で東西溝を検出した。これらは側溝を伴う南北方向1間・東西方向3間以上の直角に折れ曲がるL字型柱列（木堀または土堀）であることが判明した。

最後に柱列の西側を確認のため、残土埋め戻し後、排土置き場となっていた書庫建築予定地内の隅で柱列延長上にトレンチを設定したところ、西へ9尺にあたる位置に柱穴を検出した。検出した柱列および溝には遺構保護のため土嚢を詰め、埋め戻しを人力で行い調査を終了した。

また、並行して調査トレンチの北方に位置する東西方向の土塁および堀の部分に北トレンチを設定した。当初、それらは義満時代北山殿の地割りを踏襲しているものと期待したが、調査の結果、土塁は18世紀以降の軟らかい盛土であり、薬研堀状であった堀も最下層からガラス破片が出土しており、現時点では新しいものと断定せざるを得ない。

2. 遺 構

旧荘厳院は昭和に入ってからのものであり、それ以前は畑で、部分的に室町時代以降の整地土が残存するものの、基本的には表土の耕作土を取り除くと遺構面となる平坦な地山（黄色粘土および礫層）である。この地山面は、ほぼ標高97mである。

L字型柱列は、トレンチ南部で南北方向の2基の柱穴Pit 4・5（柱間5尺）を検出し、廊跡の柱穴と考え、続きを確認するために東にトレンチを拡張した結果、北側の柱穴Pit 4に対応する東方向3間分Pit 1～3（柱間7尺）を検出した。さらに東に延びるものと思われる。掘形はすべて直径40～60cmの円形であり、深さは平均して50cmである。柱痕は明瞭に残存し（一部中空の部分がある）直径16～18cmの丸柱である。柱穴底に上面が扁平な約30cm大の根石を据える。材質は花

崗岩の切り石1個、チャート2個、砂岩2個で、花崗岩以外はすべて川原石である。東西に並ぶ西から2番目の柱穴Pit 3と3番目の柱穴Pit 2は、プランおよび断面の切り合いから少なくとも3回の建て替えが確認

表1 遺構概要表

時 期	遺 構
室町時代	柱列、柱穴、土壇、溝、堀
江戸時代以降	肥溜、薬研堀、土塁

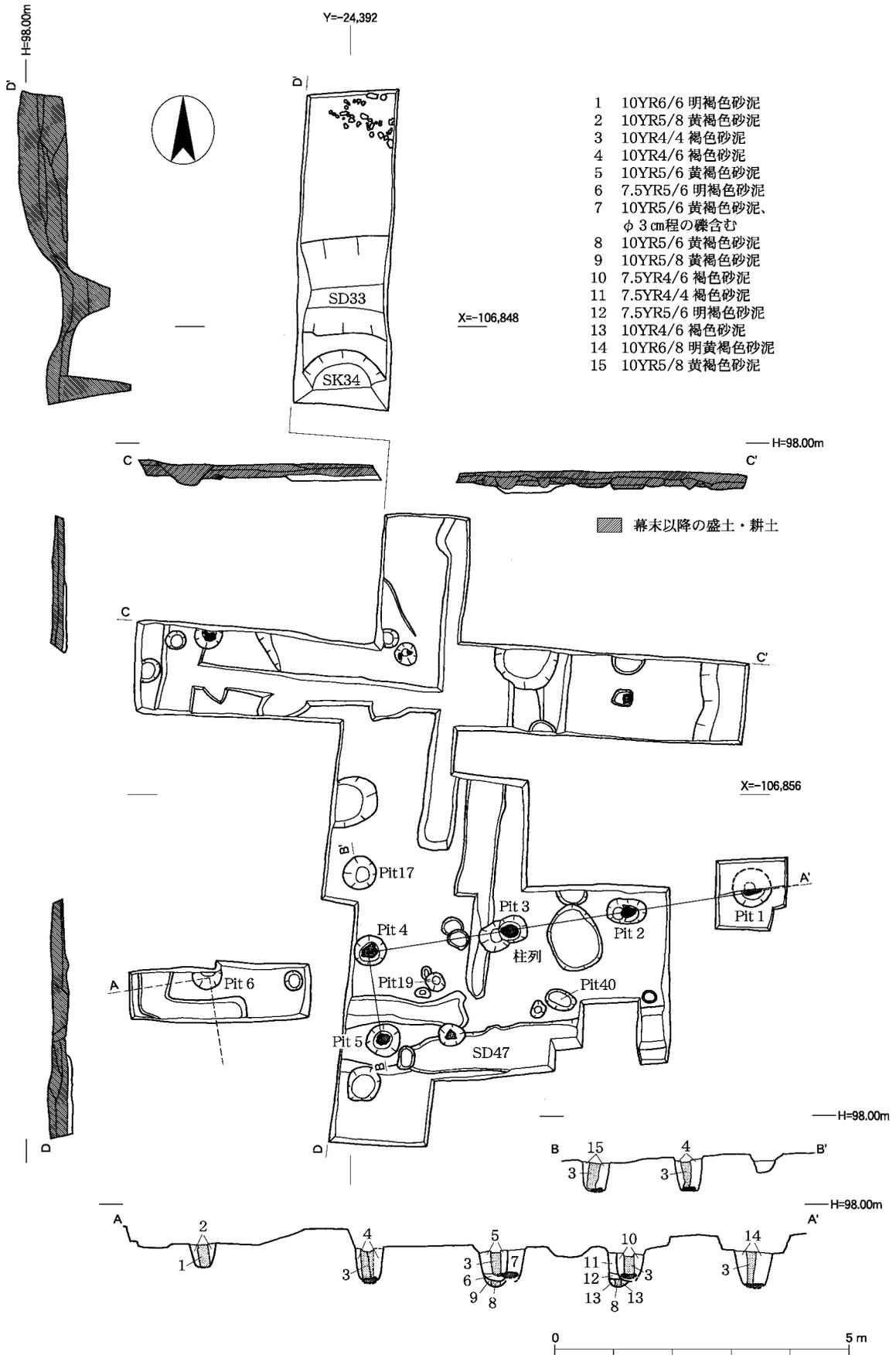


図4 遺構実測図(1:100)

できる。柱穴Pit 3は根石を持たない一番深いものが一番古く、根石を持つものがそれに次ぎ、柱痕が残存しているものが一番新しい。なお、柱痕が根石に乗らないものもある。その他の柱列柱穴については、遺構保存のため根石下は確認していない。

また、東西柱列の西延長線上9尺地点で、柱痕の残る直径47cm、深さ約50cmの柱穴Pit 6を検出した。ただし、この柱穴は根石が存在しない（ボーリングステッキで確認した）点が異なっている。東に展開する柱列とセットになるものならば、9尺の間隔はそこが出入り口または門に相当することになるだろう。

柱列に平行する溝SD47は、幅約70cm、残存深さ5～20cmあり、底に泥の堆積が認められる。南に突出した柱穴Pit 5の東から始まり、東に行くほど深くなる。この溝は北の柱列と対になるものとみられる。長さ4m分を検出しているが、さらに東に続く。

なお、南北柱列の北延長線上のほぼ4尺離れた位置に、深さ30cmの柱穴Pit17（熨瓦・軒丸瓦・花崗岩小片が出土）を検出しているが、深さが浅く根石・柱痕も存在せず、構造上の違いから上記の遺構と区別して扱った。

これらのセット関係にあるいずれの遺構も、遺物が極端に少なく（土師器小片・磨滅した瓦小片）時代の正確な判定は不可能である。しかし、7尺等間の設計計画からすれば例外もあるが室町時代の可能性が高いであろう。

また、北山殿所用瓦の破片を柱の根固めに再利用した浅い柱穴が散発的に検出できたが、建物としてまとめることはできなかった。瓦の再利用という点から考えて北山殿以降のものであるだろう。

北トレンチから肥溜SK34、薬研堀SD33を検出しているが、堆積土出土遺物から判断して幕末以降のものである。

3 . 遺 物

出土遺物は、柱穴の根固めに再利用された北山殿所用瓦や龍泉窯青磁があり、北トレンチから18世紀以降の瓦・土器類が大量に出土している。

龍泉窯青磁椀（1）はPit40、瀬戸・美濃系茶入小壺（2）は北トレンチ土壘盛土下層から出土した。

義満時代の瓦類は、小型で建物の棟か堀に用いられたと思われる。熨斗瓦2点を含む。軒瓦は、

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器・輸入陶磁器・軒瓦・熨斗瓦・鉄製品	8箱	青磁1点、軒丸瓦1点、軒平瓦3点、熨斗瓦1点、	1箱	6箱
江戸時代以降	土師器・施釉陶器・瓦・埴・雑器類		施釉陶器1点、埴1点		
計		8箱	8点（1箱）	1箱	6箱

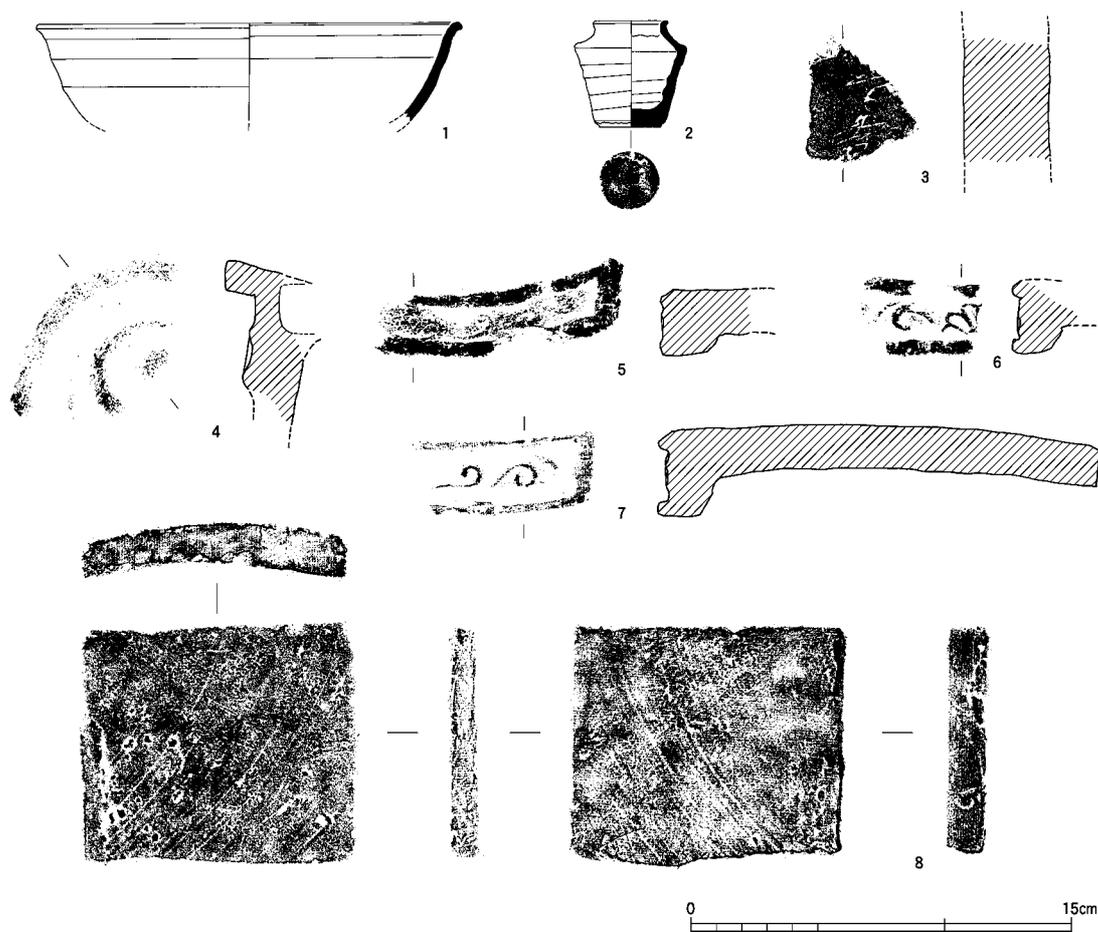


図5 出土遺物拓影・実測図（1：3）

『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書¹⁾』で分類された軒丸瓦112A・軒平瓦208B・209A・209Cと同範瓦である。これらの瓦の製作年代は応永年間に限定でき、基準資料となるものである。

巴文軒丸瓦（4）はPit19出土、112Aと同範。

菊花唐草文軒平瓦（5）は北トレンチ下層出土、209Cと同範。菊花唐草文軒平瓦（6）は北トレンチ包含層出土、208Bと同範。菊花唐草文軒平瓦（7）はPit40出土、209Aと同範。

熨斗瓦（8）はPit19出土。

また、北トレンチの幕末以降の薬研堀SD33から江戸時代の篋書がある罫（3）が出土している。何が書かれているかは不明である。

今回の調査で柱穴・土壌から出土した龍泉窯青磁椀（3片、15世紀前後、1片は貫入があり口径六分の一が残存する。）は、鹿苑寺の既調査例からも、日明貿易に積極的にかかわった義満の邸宅にしては出土数が極端に少なく、貴重である。寺の裏として利用されてきた特殊性によるものなのか廃棄過程かはつまびらかでないが、往年の北山殿の様相を物語っていよう。

4.まとめ

調査対象地である庫裏東方の台地状の高まりは、立地条件が良く、西園寺北山第や義満北山殿の中心地のひとつに比定されていたが、既発掘調査においては、それに該当する明確な遺構を検出してない。しかし、今回はじめて検出した柱列は造りが丁寧であり、トレンチ北方の崖上石不動前に位置する第5次調査（1994年度Y区茶屋跡）第2面で西へ20度振れた4尺等間の根石の据えられた掘立柱の柵列もしくは建物を検出しているが、それよりも立派である。また、東西方向の柱列は数度の建て替えがある。それが築地塀であることよりも、風・火・腐食に弱い、横板嵌殺丸柱木塀または土塀であった可能性が高い。

今回検出したものが塀であった可能性が高いことから、囲まれる建物群あるいは敷地内の区画が想定でき、今後の周辺調査では敷地内部の空間利用のあり方の実態が明らかになるものと思われる。

東西柱列の直角に折れ曲がる南1間5尺地点に位置する柱穴Pit5は、柱穴のすぐ東から側溝SD47が東に伸びていること、東西柱列の西延長線上の柱間心が9尺であることを考え合わせれば、そこが敷地内における区画の出入りに想定できる。それが門だとすればPit5は門の支え柱に該当する。門の形式からすれば腕木門を類例としてあげられるが、掘立丸柱横板嵌殺塀が描かれた『一遍上人絵伝』の「一遍聖絵第四 筑前国の武士の館」における矢倉門の可能性もある。支え柱の位置からすれば敷地内における区画の北側出入り口（南側が内部の裏門・通用門）に該当するが、西側支え柱想定地が建築予定外であったため確認できなかった。柱列が南面していたのか北面していたのかは敷地内区画および建築群の機能を考えるうえでの重要課題で、この点に関しては今回の調査地横に位置する土蔵の移築工事が計画されているので、その事前発掘調査時点で判断されるべき事柄である。なお、柱列の東端・西端柱穴は半載するにとどめ、後の検証に委ねられるよう保存した。

註

- 1) 『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年

第9次調査

1. 調査経過

本調査は、特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園第9次調査にあたる。今回の発掘調査は、昭和35年に改築された土蔵の移築工事に先行して実施した。調査地の東側では、2001年5月に第8次発掘調査を実施している。また、調査区西側でも1989年に発掘調査を行っている。

調査は、先ず重機によって地表下約30cmまで掘り下げを行った。遺構は、旧耕土の直下で地山面を検出した。調査区の中央部では、東西方向に掘られた溝へ近世と思われる瓦などが多量に投棄されていた。また、現代（戦前）のゴミ処理用の穴が溝状に認められた。

なお、調査中の1月30日に、京都市立桂中学校の生徒2名（加藤亮平・前田 桂）がチャレンジ体験で調査に参加した。

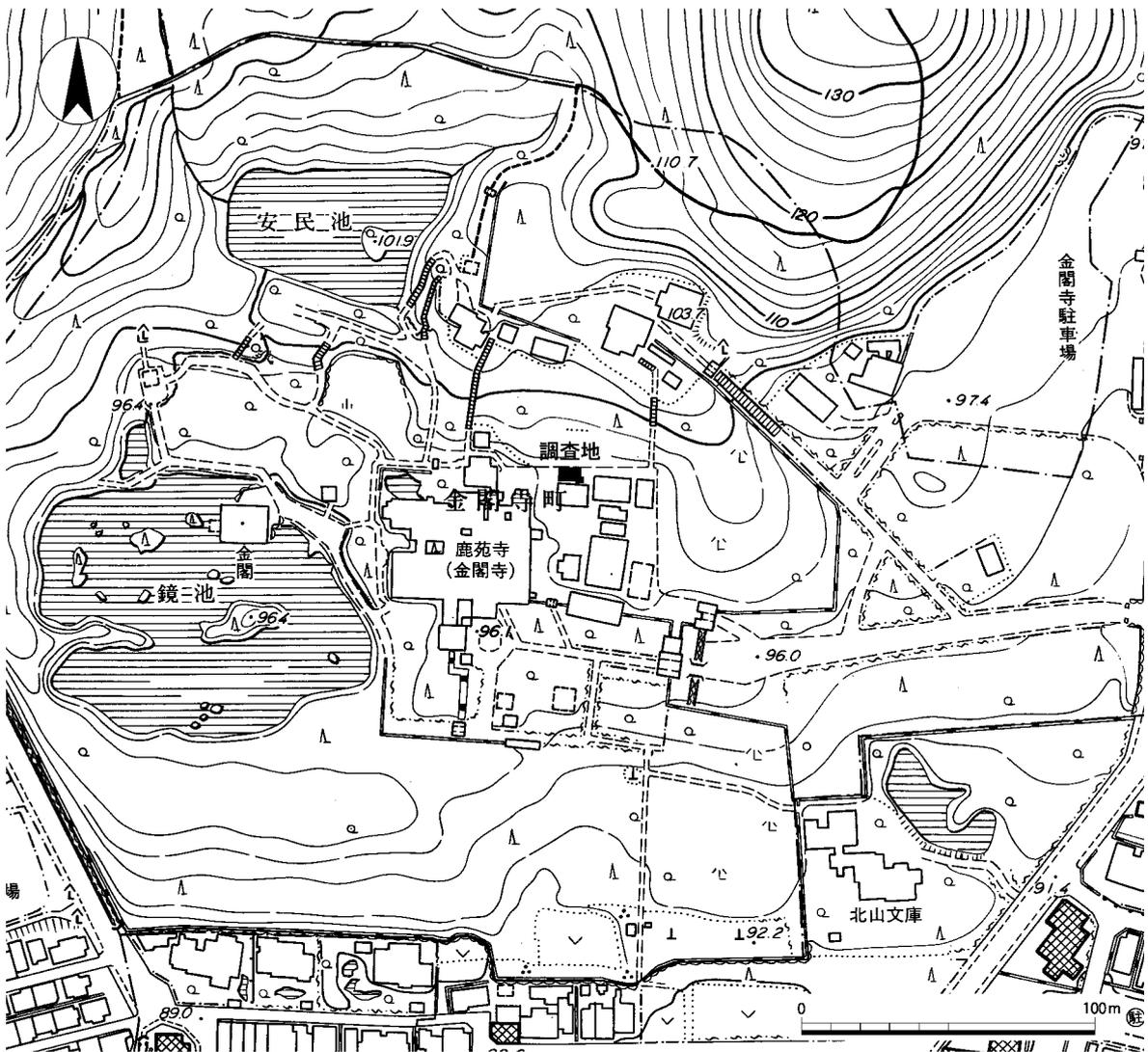


図6 調査位置図(1:2,500)

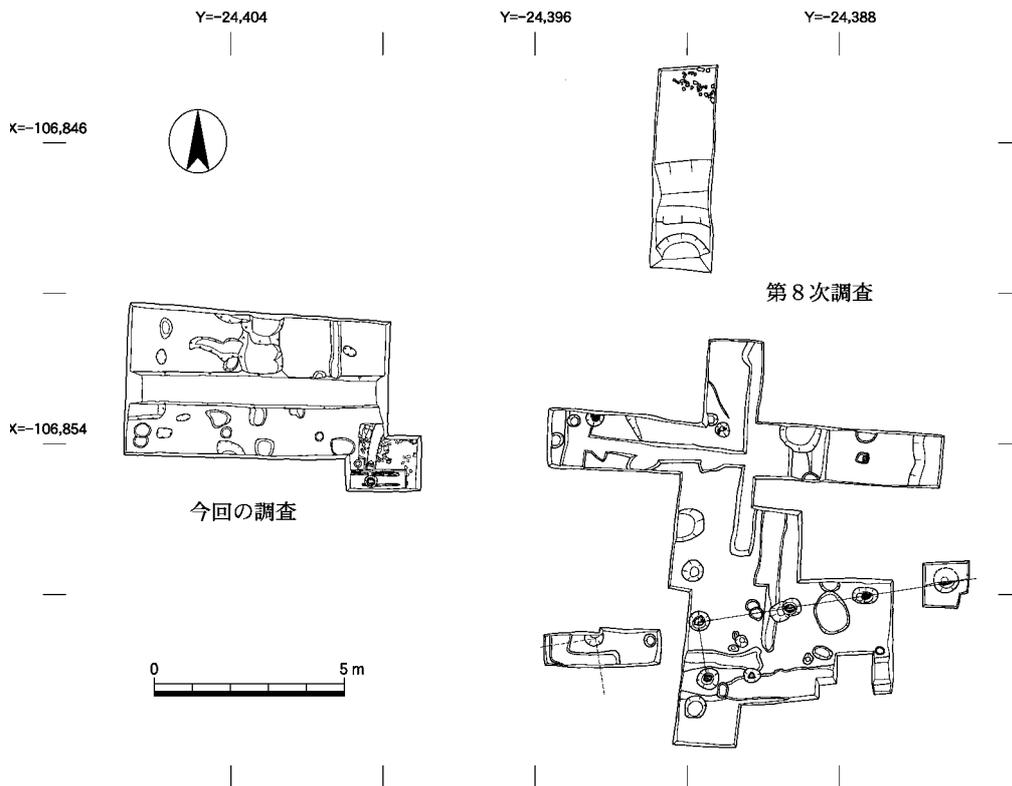


図7 調査区配置図(1:200)

2. 遺 構

調査区周辺部の地形は、北西側が高くなっており、南および南東方向へ行くに従って徐々に低くなる。調査区の基本層位は、最近の盛土の下に、旧耕作土が約30cmほど見られる。その下層は黄褐色の地山となるが、調査区の東半部では褐色泥砂層の堆積が認められた。この層は、土師器の小片などを包含している。

調査区の北側では、昭和に設けられた小規模なゴミ処理穴が重複して見られた。また、調査区南東角では現在の土蔵が建てられる以前の土蔵の基礎を一部発見した。今回の調査では、北山殿に関する明確な遺構は土壌だけであった。



図8 調査前全景



図9 調査状況

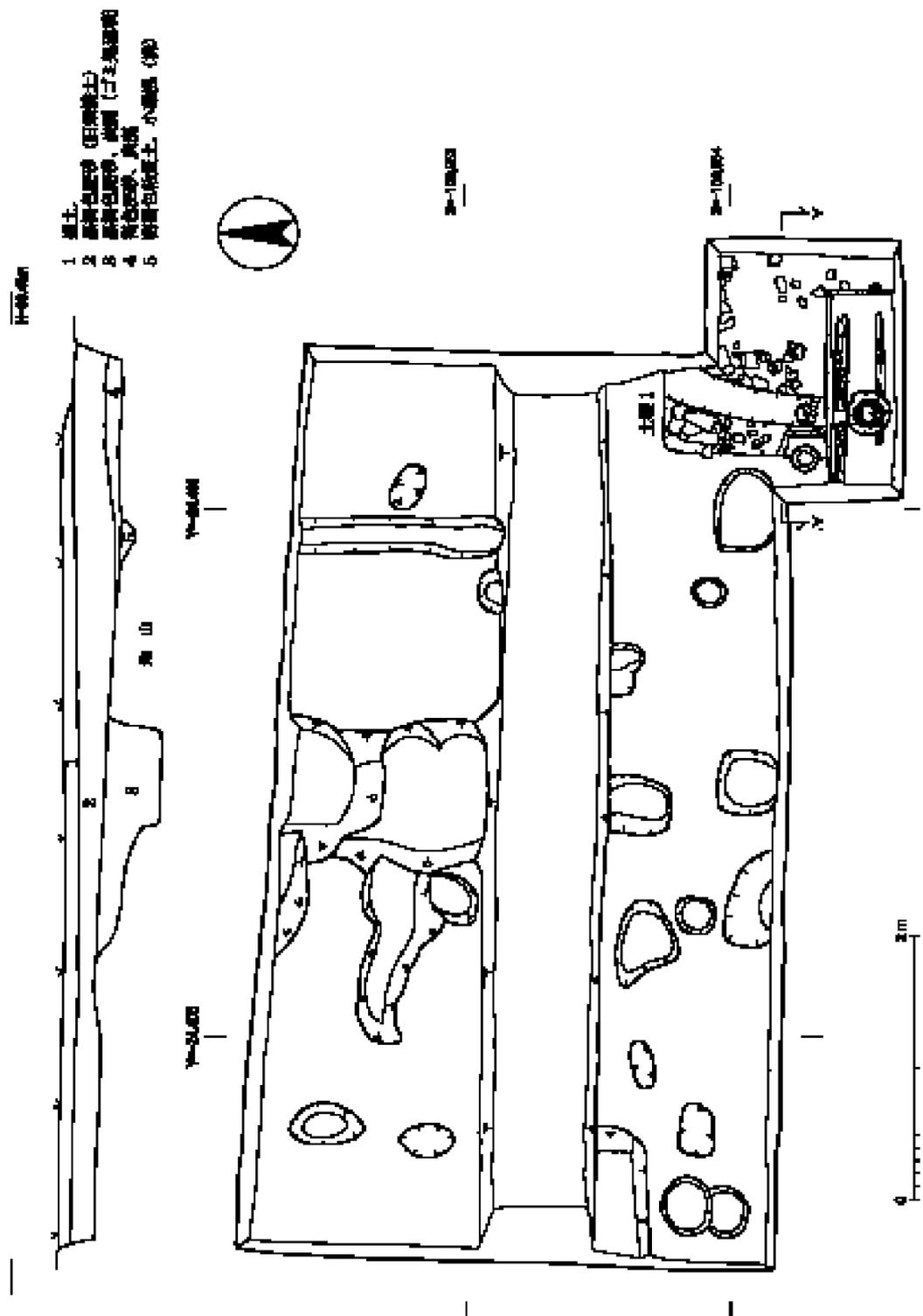


图10 遺構実測図 (1 : 50)

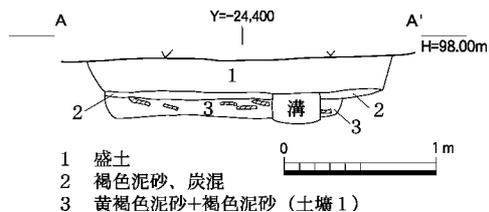


図11 南壁断面図(1:50)

表3 遺構概要表

時期	遺構
室町時代	土壌
江戸時代以降	柱穴、溝、土蔵基礎、ゴミ処理穴

土壌1 調査区の南東角で検出したが、遺構はまだ調査区外へと広がっており正確な規模については明らかでない。土壌の深さは、15~20cm前後で底部は凸凹している。土壌内からは、土師器や軒瓦などが出土した。

3. 遺物

遺物のほとんどは土壌1から出土したが、量的に最も顕著であったのは瓦類である。土器の大半は土師器で、出土点数も少なくいずれも小片であった。なお、少量出土した土師器は保存状態が悪く図化できるものは無かった。

瓦は、丸瓦・平瓦のほかには瓦当面を比較的良好に保った軒瓦が数点出土している。軒瓦の瓦当文様は、巴文と蓮華文に2分できるが、ほとんどが巴文である。また、巴文は珠文が巡るものとそうでないものがある。軒丸瓦は、瓦当面の寸法の違いにより3種類に分類できる。

軒丸瓦(1) 文様は三巴瓦で、外縁に沿ってやや大粒の珠文が19個巡る。焼成は軟質で、色調は暗灰色を呈する。調整は丁寧である。瓦当直径は13.5cm前後である。

軒丸瓦(2) 文様は三巴瓦で、外縁に沿って大粒の珠文が蜜に巡る。焼成は軟質で、色調は暗灰色を呈する。丸瓦部凸面には縦方向の縄叩きが認められる。瓦当直径は15cm前後に復元できる。

軒丸瓦(3) 文様は三巴文と考えられる。焼成は軟質で、調整は丁寧である。瓦当直径は10cm前後に復元できる。

軒丸瓦(4) 瓦当文様は明らかでないが、珠文が巡る。瓦当面には細かな離れ砂が顕著に見られる。焼成は良好で、調整も丁寧である。

軒丸瓦(5) 瓦当中央に簡略化した花文を飾り、外縁に沿って小粒の珠文を配する。調整は丁寧である。瓦当直径は10cm前後に復元できる。

軒平瓦(6) 鈎の手状の唐草を飾る。平瓦部凹面や瓦当部凹面には細かな布目痕が残る。平瓦

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器・輸入陶磁器・軒瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦	2箱	軒丸瓦5点、軒平瓦1点	1箱	0箱
計		2箱	6点(1箱)	1箱	0箱



図12 軒瓦拓影・実測図(1:3)

部側面・凸面は丁寧にナデ調整を施している。焼成は良好である。

丸瓦・平瓦 いずれも破片であるが、83点出土している。その内訳は丸瓦6点、平瓦77点である。その他に、面戸瓦が1点出土している。

4.まとめ

今回の調査は面積が極めて小規模であったため、北山殿や鹿苑寺に関する遺構の検出は希薄であった。しかしながら、調査区の南東角で発見した土壌1からは、北山殿に関わると考えられる瓦類や土器類が出土した。

今回の調査区周辺部で過去に実施した発掘調査では、北山殿関係の遺構を少なからず発見している。例えば、調査地のすぐ東隣で行った第8次調査では、東西方向の柵列と出入口を想定させる柱穴列とを検出している。しかしながら、1988年度に実施したC区や1989年度のG区などでは北山殿の遺構は検出していない。こうした状況から、この周辺部の遺構密度はそれほど高くはないと思われる。

土壌1からは、軒瓦や丸瓦・平瓦などが比較的まとまって出土している。既往の調査で発見した瓦類の出土地点を示したのが図13である。それによるとこの周辺部で、瓦が比較的まとまって出土したのは今回が初例である。出土した瓦は、小振りの軒丸瓦が多く見られることや平瓦・丸瓦も顕著であること、また面戸瓦も含まれていることから、檜皮葺屋根の葺棟瓦と考えている。

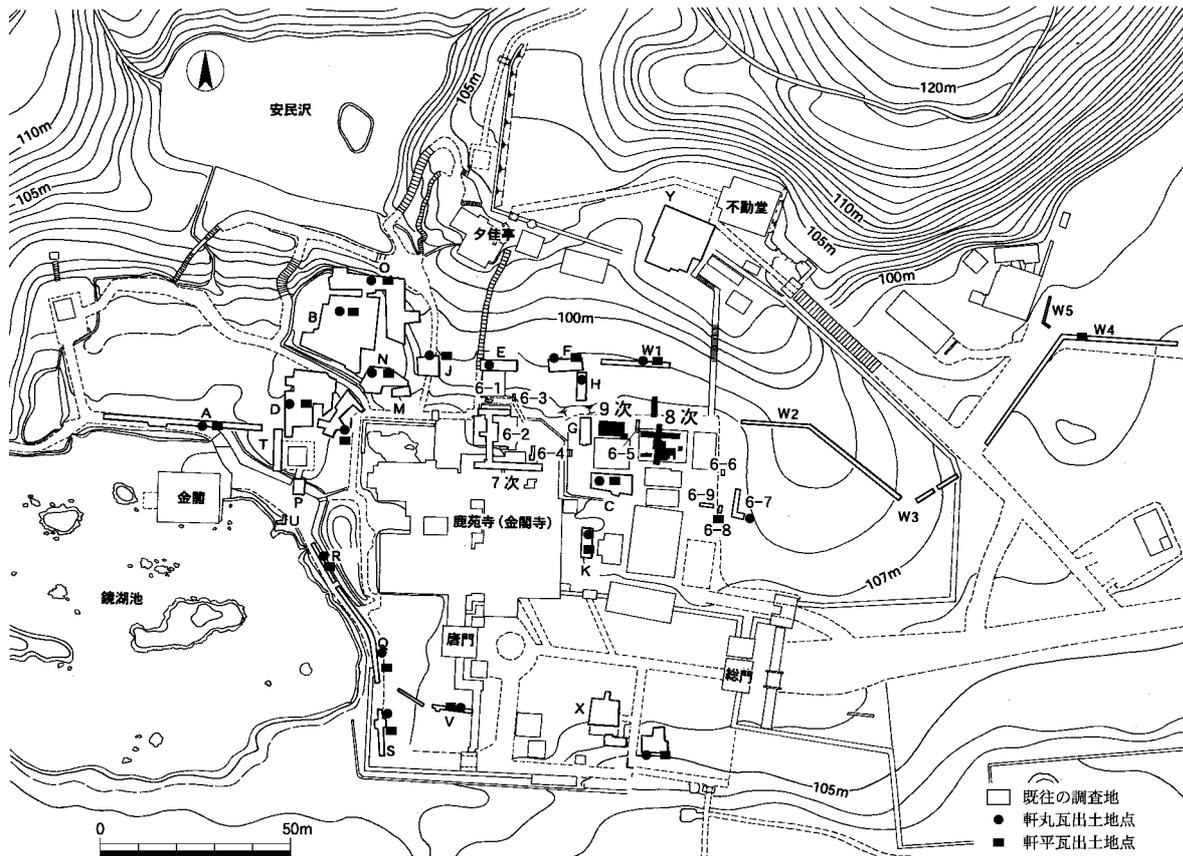


図13 調査地と瓦出土地点（1：2,000）

表5 調査一覧表

調査回数	調査区	調査期間	面積	文献
第1次調査	A～D区	1988年10月25日 ～1989年3月31日	600m ²	『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』 1997年2月
第2次調査	E～V区	1989年7月7日 ～1990年3月13日	722m ²	『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』 1997年2月
第3次調査	W1～W5区	1990年5月24日 ～1990年7月20日	148m ²	『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』 1997年2月
第4次調査	X区	1990年11月25日 ～1990年12月15日	56.6m ²	『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』 1997年2月
第5次調査	Y区	1994年8月23日 ～1994年10月21日	199.5m ²	『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』 1997年2月
第6次調査	6-1～6-9	1997年11月7日 ～1997年12月27日	42m ²	「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1999年3月
第7次調査		1999年3月3日 ～1999年4月5日	115.2m ²	「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 2000年3月
第8次調査		2001年4月23日 ～2001年5月24日	64m ²	本報告
第9次調査		2002年1月25日 ～2002年2月5日	25m ²	本報告

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき・とくべつめいしょう ろくおんじ(きんかくじ)ていえん							
書名	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-9							
編集者名	鈴木久男・東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき・ 特別史跡・ とくべつめいしょう 特別名勝 ろくおんじ 鹿苑寺 (きんかくじ)ていえん (金閣寺)庭園	きょうとしきたく 京都市北区 きんかくじちやう 金閣寺町	26100		35度 02分 11秒	135度 43分 57秒	2001年4月 23日～2001 年5月24日	64㎡	書庫建築
						2002年1月 25日～2002 年2月5日	25㎡	土蔵移築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別史跡・ 特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺)庭園	史跡	室町時代	種列・柱穴・溝・ 土壇	土師器・青磁・軒丸瓦 ・軒平瓦・丸瓦・平瓦 ・熨斗瓦				
		江戸時代以降	肥溜・堀・柱穴・ 溝・土蔵基礎・ゴミ 処理穴	土師器・施釉陶器・ 瓦・埴				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-9
特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

発行日 2003年1月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961